
SOLITUDE WAR

トロワ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

SOLITUDE WAR

【Zコード】

Z5137F

【作者名】

トロワ

【あらすじ】

日々平凡に過ごす自衛官、田中渓斗士長の部隊にある日出動命令が下った。内容はとある寒村を占拠した東欧系テロリストの殲滅と、誘拐された世界的大企業の社長の娘、暁鈴音の救出。しかし、敵はテロリストのみではなく異形の者まで現れ、田中士長は孤独で壮絶な戦いを強いられる。

FILE1 プロローグ（前書き）

「拝讀ありがとうございます。皆様の暇を潰すお供になればと思います。ちなみに、内容的にはアクションとホラーの中間に位置しています。のんびりと応援よろしくお願いします。

FILE 1 プロローグ

目眩がする

ぼんやりと目を開けるとそこは銃弾が飛び交い、爆発が起こり、地面に銃弾があたり砂がはぜ舞い上がる世界

意識が朦朧とする中、俺の頭の中には一人の人が浮かんでいた。

「こんなところで死ぬ訳にはいかんな。」

俺は軽く頭を叩き意識を戻し、横に落ちている相棒でもある銃を拾い上げた。

「この銃はな、陸自の誇る89式小銃だ。口径は5・56mmで装弾数は30発。お前の黄泉路への案内者だ。」

乾いた銃声が辺りに響いた

事件の発端は、それから数ヶ月前に遡る。

とある気持ちいい秋晴れの平日。

訓練に勤しむ男がいた。

男の名は田中渢斗。

陸上自衛隊の通信科に勤務する陸士長だ。外国軍で言つて上等兵の階級と言えばわかりやすいだろうか。

年齢は20歳。特徴はと言えば大柄で、あまり銃を使う事のない通信科だが銃には精通している。

しかし、別にレンジャーや並みの体力があるわけでもなく、至つて平凡な自衛官だった。

「ほら、ラスト一週だ、頑張れお前ら！」

今は武装走の訓練中で、重装備で銃を持ち走るところ競技の練習中だ。

しかも銃は旧式の64式小銃。新型（とは言つても配備されてから20年近く経過しているが）の89式と比べると顕著に重量の違いが身に染みる。

上官の激が飛ぶ中、田中は汗だくになしながら走る。息は切れ、迷彩服も汗だく、足も痛みだしている。

「クソッ、早く終わらねえか。」

田中は苦虫を噛み潰したような表情でラストスパートをかけて疾走する。

ようやくゴールに到着し、肩で息をしながらゆつくつと歩くと、同期からお疲れさまとスポーツリンクを渡された。

「ありがと。助かるぜ。」

一気に飲み干して同期を見ると、同期でもあり親友でもある高西士長に礼を言った。

「これメチャクチャキツいからしゃあないで。」

笑いながら田中の肩を高西士長が呟く。

教育隊からの付き合いだが同期の中では一番気が合つて今に至る。

「とにかく今日はこれで終わりだから課業後はのんびりこなすや。」

「高西に話すと、高西は険しい顔付になる。」

「 今日はやつもいかんつぱいで 」

関西弁の訛りでしゃべる高西がやつぱいた。

「 え? なんかあつたのか? 」

田中がそう聞くと高西は小声で話しあじめた。

「 なんかな、最近俺らの管轄内のある田舎の村で不穏な動きがあるらしいで。 」

不穏な動きってなんだ? と田中は考えたが、スッキリする答えは得られなかつた。

「 不穏な動きとこ'うと? 」

高西が答える。

「 なんかどこかの外国人やらが村でコソコソやつてゐるらしい。詳しく述べ知らんけどその事で何か話があるんだとさ。 」

説明した高西に田中がため息をつきながら答える。

「 そんなん警察の管轄じゃねえか。 わざわざ俺ら自衛隊が動くような事でもないだろ。 」

「 それがそれでもな'つぱいで。 とにかく1600丁会議室集合だ。 」

そして田中と高西は会議室へと向かい、事の概要を聞く。 部屋には部隊の面々が揃っていた。

いつもの陽気でおちやらけた雰囲気は消し飛び、皆真剣な表情でプロジェクトに映された映像を見る。

映像は田舎の寒村の航空写真に始まった。

田舎の村と聞いていたのでもっと小さなのを想像していたが、意外と大きな村だった。

田舎によくある木造の建物が無数に並び、集落の中心と森の中に巨大な屋敷が広がっていた。

後は木々が生い茂った森や山、田畠や川、集落があるだけだった。プロジェクトが次の映像を映し出す。

森の屋敷に人がわらわらと集まっている。

「これのどこが有事なんだ？」

田中は一人、ぼんやり考えていた。
上官から説明がある。

「えー、現在この白鳥村では非常事態が発生している。」

「非常事態？ なにが起こってるんだ？」
嫌な予感が体を駆け巡る。

「白鳥村では現在、東欧系テロリストが占拠している。この屋敷内が東欧系のテロリストと思わしき集団が拠点としている場所だ。」

田中は驚愕して話を聞いた。
「テロリスト！？」
最近物騒になつてきたが未だ平和な日本にテロリストお！？

「ちなみに警察が地域住民からの要請を受けて出動したがことじ」と
殺害されたらしい。今回の事はマスコミには報道されていない。」

そこまで重大な事件なんて今まで無かつただろな。

「それと、世界的企業の暁グループの」息女の暁鈴音が数日前に誘拐された。

身代金を要求している。

額は50000ドルだ。

我々が作戦の要として出動する。」

田中は、聞きなれないドルに戸惑いつつも、人質を取つたテロリストに嫌悪感を募らせた。

さぞかし親は苦しんでるのだろう。いくら金持ちでも子供を誘拐されれば眠る事もできないだろうし食事も喉に通らないだろう。

「作戦開始は明朝の0500時。各員装備を準備するよ。質問は？」

咄嗟に田中が拳手をする。

「なんだ田中士長？」

直属の隊長でもある1尉が田中を向ける。

「何故我々なんですか？ いえ、何故空挺部隊等が先に行かないんでしょう？ それに、我々通信科だけというのも疑問に思います。」

先ずは特殊部隊等のエリートが真っ先に向かうが常だ。

しかも、後方支援の通信科だけだなんて聞いた事がない。

「それがだな 言いだしにくいんだが」

隊長が言いだしにくそうに続ける。

「暁グループの総帥である暁源一氏が大事にしたくないと言つてゐるんだ。もし過剰な反応をして娘を殺されたらとんでもないと聞かなくてな、無線等で連絡系が確実にできる我々だけの小人数での作戦になつてしまつた

こんな事では連携もとれる訳ないが、やるしかない。」

隊長は苦悶の表情で語つた。

それはそうだ、部隊は他部隊との連携があつてこそ効率良く作戦を進められる。

我々だけでは連携もくそもない

「分かりました。ちなみに第1中隊や本部管理中隊は出動しますか？」

「いや、我々第2中隊だけだ。これはかなり厳しい作戦となる」

なんてこつた！

2中隊だけでの作戦なんて規模が知れてる。

田中は今改めて自分に死が近づいているのを感じた。

「よし、各人準備をせよ！別れ！」

隊員が敬礼をし、作戦に向けて準備を始めた。

この先地獄が待ち受けていることをまだ田中は知らなかつた

「…………」

あれ？私は何してたんだっけ？

確か、大学終わって帰ろうとしたんだよね。

そこまでは記憶あるんだけどそれからどうしたんだ？

迎えの車はどうしたのかしら

いつもならでつかい車で待ってるのに。

暁鈴音はぼんやりした頭で記憶がなくなる以前の出来事を反芻していました。

周りを見渡しても見えるのは狭い部屋で木の床と、入り口だらり場所には鉄格子がついてるだけ

「つて、えええ！？鉄格子！？」

一人驚きを惜し気もなく声に出してぶちまけた。

そう、鈴音がいる場所は簡単に言つなれば座敷牢。

堅牢な鉄格子に守られ、中にいる者を決して逃がさない檻だった。

「私なんでこんな所で閉じ込められてるの？」

首を傾いでうーんと唸りながら考える鈴音。

「まーつたく分かりません。」

そのまま鈴音はポケットから携帯を出そうとまわぐる。しかし、ポケットには何もない。

「ありや？ 携帯なくしちゃったよ。」

困った表情をしていると、鉄格子の向こうの扉が開いた。そこには大柄な白人が無表情で立っていた。

「才前、俺タチガ誘拐シタ。才前ノ父親ガ金ヲ寄越サナイト才前死ヌ。」

片言の日本語で白人男性は言う。死ぬという言葉を言う時に、腰のホルスターにつけた拳銃をちらつかせた。

「誘拐？ 私誘拐されたの？ 死ぬってなんで？ 訳わからんないよお！ 死にたくないよ！ ここから出して！」

鈴音は死ぬという言葉と拳銃で、これが「冗談なんかではない事を悟つた。

「俺タチハ金ガイル。ダカラ才前ヲ誘拐シテ要求シタ。モシ払ワナカツタラ代償トシテ才前ヲ殺ス。」

白人の男が無表情でそう言つた。

人を、しかも女子供を殺すのを全く厭わない目だった。彼は殺すとなれば容赦なく誰でも殺すだらう。そんな雰囲気を漂わせていた。

それを察知したのか、鈴音は目に見える程萎縮していた。

鈴音の顔に浮かぶのは恐怖。ただそれだけだった。

「お願い！殺さないで！私死にたくない！」

必死の懇願も虚しく、白人は無表情に部屋の外からパンと水が入ったコップを鈴音の前に置く。

これが鈴音に与えられた食事なのだろう。
いつもの食事とは比べものにならない。

「飯、ダ、食工。」

そのまま白人は部屋を出て鍵をかけてどこかへ行ってしまった。
誘拐されてから何も口にしてない鈴音は腹の虫が鳴り、前にあるパンを手に取り食べた。

いつもならこんなパン食べもしなかつただろうが、空腹の鈴音にはおいしく感じられた。

一気にパンを胃の中に収めると、水を流し込んだ。

こんな物でも生き返るようだ、と鈴音は一人ぼんやりと考える。

「私これからどうなるんだろ？死んじゃうのかな いきなりこんな事になつても実感ないし、訳わかんないよ お父さんがお金払つてくれればいいけど。」

ここに曉鈴音の紹介、生い立ちを話そつ。

鈴音の家庭は世界屈指の大企業だ。

曉グループという名を知らない者はなく、機械関係や電化製品に始まり、他にも日本では珍しい銃器関連の製造、開発にも着手し、幅

広く展開している。

一代で企業を立ち上げここまで大きくしたのは鈴音の父親でもある
暁源一の努力と人望だ。

もともとは中部地方の工場で働いていた源一は、人柄もよく純朴な
男だった。

ある日、

休日には伯父と山に獵に行き、そこで銃を学んだらしい。
そして、源一がふとした思い付きで会社を立ち上げる。

それが想像以上に発展したのは製品等はもちろん、源一の人懐こい
性格と優しさ、器量だった。

もともと源一には経営の天性があつたらしいが、それに人の良さが
拍車をかけていた。

成功し、金持ちになつた源一は、富豪によくある人を見下した態度
や、人を外見や着ている服の値段で判断するような事はなかつた。
それ故どんな人からも好かれ、頼りにされてきた。

結婚したのも暁グループを設立する前に、大学で知り合つた涼子
と結ばれた。

涼子も良妻賢母であり、少々天然でドジなのを笑われるが、夫を影
で支えてきた。

源一も今まで妻一筋で、浮ついた話など微塵もなかつた。

その間にできたのが鈴音である。

鈴音も同様、両親の性格の良さと、母に似た可愛らしい整つた童顔
の顔立ちに、天然でドジな所を引き継いでいた。
よく親子揃つてドジをやって笑われている。

源一はそんな所まで似なくてよかつたのによく苦笑するが、二人のそんな掛け合ひを見て和むので本当は微笑ましく思つてゐる。

鈴音は幼少からピアノやバイオリンを学び、料理好きな涼子からも料理も学ぶ。

家にはメイドがいるから実質家事はやらなくていいのだが、涼子の指導方法として家事全般はやれるようにしていた。

学校も名門である所へ行き、現在まで上位の学力を保つていたが、体育は生来のドジを遺憾なく發揮し、からつきしの成績だった。

こんな鈴音にも悩みがあった。

年頃の女の子にある恋愛事情には全くついていけなかつた。

今もなのだが、中学時代から鈴音がフツってきた男は数知れず。街を歩けば高確率でナンパをされ、ほとほと困つてゐるのである。

一度しつこくナンパされた事があり、それから少し男性恐怖症になつていた。

たまたまその時は無理やりどかへ連れてかれそうになつた所をビックからか男が現れ助けてくれたのだが、その光景が忘れられなかつた。数人で取り囲まれてゐるのに、一度も攻撃を食らう事なくチンピラどもを鬼神の如き強さで完膚なきまで叩き潰した。

その後、固まつてゐる鈴音に困つたよつた表情をして笑つてゐる男が、「野蛮な所を見せてすまない。とにかく君は安全な場所まで行くんだ。これからは気をつけるんだよ。」と言つて、そのままタバコをくゆらしながら背を向けて行つてしまつた。

鈴音は今まで男は嫌いだったが、少しだけ考え方を改めたのだった。

鈴音の世話がかりにその話をしたら、まず危険にさらされた事を驚き、その後にまだまだいい人がいるもんですね、と微笑んだ。

しかし、いまだに男と接するのは苦手で誰とも付き合つた事はなかった。

周りが恋愛の話をしても、鈴音には話せなかつたし、周りの女は彼氏が医者だとか、どこの企業の御曹司だとか、なにかと金や権威を引き出す。

そんな相手の肩書きだけを見る恋愛はしたくないと鈴音は思つていたのもあり、周りからそんなに可愛いのに何故?とか、鈴音は理想が高いんだねと冷やかされても気にしなかつた。

鈴音は特に彼氏が欲しいとも思わなかつたし、そのうち運命の人と出会えればいいやとしか考えていなかつた。

そんな単調な毎日が続くと思つていたが、それは脆くも打ち碎かれた。

現に今はこうやって監禁されてるし、もしかしたら命がなくなるかもしれない。

鈴音は今までの事を思い出し少しでも気を紛らわせようとしていた。

FILE3 スニーキングミッション

「 いとうら山蛇、配置に着いた。」

まだ薄暗い中、林に身を潜める影があった。
影は田中、高西の二つ。

各員にはコードネームが与えられた。

田中は山蛇、高西は山鷹というコードネームを授かり、一人一組のバディ行動となっていた。

第2中隊だけでは人數的に難がある。

通信系を確保するために半数以上裂かれ、残りが実質の救出部隊となつた。

ほとんどが陸曹だが、少数で陸士も混じっていた。
その中の一人が田中士長だった。

0500時、部隊は配置に着き通信の確保も完了した。
救出部隊は89式小銃を保持し、顔にはドーランで迷彩柄にフェイスペイントをしている。

背中や鉄帽には草を携え擬装をし、森林の中で隠れていれば容易には見つけられないだろう。

「 田中、まさか俺達が選ばれるとはな。遺書は書いたか?」

高西が田中の横で伏せながら聞く。

「まあ一応な。つて言つてもいきなり書かされても何書けばいいのかわからんかったがな。」

双眼鏡で山を監視しながら田中は高西にそう伝えた。

「 そうだな。とにかく俺達はこれから集落に向かうんだが、何か変わった所はあるか? 」

田中は高西に双眼鏡を渡した。

「 まあ実際に自分で見てみろ。敵さんがいるぜ。 」

双眼鏡の先には、集落で監視しながらうひうひしててテロリストが何人もいた。

皆、手にはAK47やMP5等の銃器を持ち、迷彩服を着ててる。

「 本部にちらり山蛇。敵の武装はAK47、MP5、VZ61、ドッグノフスナイパーライフル、果てはG36Cだ。 」

田中が無線機を使って本部に連絡する。

「 了解。山蛇、集落には何人いる? 」

本部から通信が入った。

「 集落内にはちらほらと敵が散見されるが、今見えるのは8人だ。 」

田中が伝えると本部から新たな指示が下った。

「 山蛇、山鷹と共に集落へ近付き偵察を実施しろ。 」

「 いちらり山蛇、了解した。 」

田中は無線を終えると高西に話しかけた。

「今から俺とお前で偵察に向かう。とりあえずあの吊り橋を渡つて、森林地帯を抜けよう。」

集落に入るには吊り橋を渡るか、裏の大通りからの一いつしかない。大通りは敵の大軍がバリケードを作り、警備をしているので大々的な戦闘で敵を殲滅しなければ入れそうにない。しかし、少数の部隊ではリスクが高過ぎる。だからね敢えて吊り橋から偵察をし、異常がなければそこから進む予定だった。

田中と高西は89式小銃を構えながら慎重に吊橋へと進む。朝露に濡れた草木や路面が湿った朝独特の気候を醸し出している。89式小銃に付けられたダットサイト越しに吊橋を見る。特に異常はない。

「よし、クリアだ。吊橋を渡るぞ。」

田中が先を行き、高西を先導する。

「ちょっと待つてくれ、しょんべんがしたい！」

「しゃあねえな、どこか物陰でしてこい。先に行つてるからな。」

高西は申し訳なさそうに草むらへ行き、用を済まし始めた。

田中は警戒しながら吊橋を渡り、半分近くまで来ていた。その時、背後でブチッ！という音が聞こえた。

「ん？ 音？」

背後を振り替えると、吊橋を支えている紐が一本、また一本とひき離れている。

「まづいーー」のままじや落ひるじやねえか！チクショウウーー

田中は脱兎の如く、吊橋の終わりに向かつて走りだした。背後で高西の声がする。

「田中あー走れーとにかく走るんだー逃げろーー！」

高西が絶叫してる。

田中は、んな事言われなくとも分かってるつーの。と余裕がないのに一人思つっていた。

背後にはブチブチと紐が切れ、崩れ落ちていく吊橋が田中を飲み込もうと迫っていた。

吊橋の終わりまで後少し、田中は全力疾走していた。

「クソがああああー！」

吊橋に飲み込まれると思った瞬間、ヘッドスライディングよろしく田中は飛び込み、なんとか陸地にたどり着いた。

肩で息をしながら田中は後ろを振り返った。

吊橋はものの見事に崩れ落ち、谷底にその残骸を確認できた。

残っているのは吊るためにのばされていたロープのみだ。

「間一髪だったな」「

ほっと胸を撫で下りると分断された向こうの陸地で高西の声が聞こえた。

「田中！大丈夫か！？」

心配そうに高西が向こう側から叫ぶ。

「ああ、なんとかな！つたくとんでもねえ目にあつたぜ！もう少しで殉職だつた！」

田中も高西が無事だつたようで軽口をたたく。

「それなら安心したわ！これからどうする？』

言われて気付いたが、今使える唯一の道を潰したことになる。もう一方はテロリストの厳重なバリケードが張り巡らされた一種の要塞化された道だけだが、そこはまず使えない。

「道がこれ以上ねえつて事はまさか俺だけしか行けねえのか？」

田中は愕然とし、落ちた吊橋を眺めた。

「くそつーこの吊橋さえ落ちなければ ん？」

何気なく見た吊橋にふと違和感を感じた。

田中は慎重に近付切れたロープを見る。

「これは自然に切れた訳じゃねえな 銳利な刃物で半分ほど切つて

あつたのか。」

ロープは不自然なくらい断面がきれいに切られている。意図的に誰かがロープに切れ込みを入れ、誰かが通ると自動的に吊橋が落ちるようトラップにしてあつたのだ。

田中はそれを高西に伝えると高西もそれを確認した。

田中はおもむろに無線機を取り出し通信を開始した。

「HQ、こちら山蛇。偵察中に吊橋を渡つたのだが吊橋が落ちて分断された。山鷹は吊橋を渡つていなかつたため、白鳥村側には渡つていない。ちなみに、吊橋のロープには意図的に刃物で切れ込みを入れてあつた模様。以上。」

今あつた事を端的にHQ（本部）に報告すると、すぐに返答が返ってきた。

「こちらHQ、事態は了解した。山鷹には一度こちらに戻るよう通達する。山蛇は引き続き偵察を行いながら白鳥村へ向かってくれ。以上。」

田中は俺一人でやるのかと思ひ返答をする。

「こちら山蛇、了解した。ヘリ等での増員または航空支援は受けれないか？以上。」

すぐさまHQから返事がくる。

「こちらHQ、航空支援と増員は受けれない。敵勢力はRPGを保

有しているとの情報がある。それと、ヘリではすぐに敵に存在が露見されてしまう。厳しいだろうが一人で全ての任務遂行をしてもらいたい。以上。」

一人で全ての任務遂行だあ！？

無茶にも程がある！

映画じやねえんだからヒーローのようにはいかない。

だがやるしかない。

今動けるのは俺しかいない。

俺はただやれる事をするのみだ。

命令されたらそれを遂行する。途中で投げ出したりなんかできない。

それが自衛官だ。

とにかく俺の行動によって暁鈴音の命運が決まる。

「一ひら山蛇。了解した。ただいまから状況を開始する。」

たつた一人だけで救出任務か

無謀にも程がある

やらなきや暁鈴音が死ぬだろう。
スーキングミッショング
潜入任務だな。

田中は決意を固め、89式小銃を握りしめ険しい林道を進み始めた。

田中は、近くにある小高い丘へ移動し、集落を双眼鏡で覗いていた。眼下には隔絶された集落が広がり、田中は白鳥村の大きさに驚いていた。

吊橋が落ちた今、唯一の道は村の中央へ続く大きな道のみだったが、そこはテロリストによつて封鎖され、車両はおろか人さえも通れない。

無理に通ろうとすれば射殺されるだろう。

その道が事実的に封鎖され、白鳥村は今、文字通り陸の孤島となつていた。

「……からだとよく見えるな。中央の道とはあの事か。」

田中は双眼鏡で白鳥村内の偵察を行つてゐる最中、封鎖された道（中央道）を発見した。

その先にはテロリストの車両が何台も配備され、道には手製の要塞が築き上げられてゐる。

道の両端には土嚢が積み上げられ、R P Kと思わしき重機関銃が一門配置されていて、その後ろには家具やら廃車両が道を塞ぎ、土嚢も積み上げられてゐる。

そのまた後ろではテロリストの門警の詰所になつてゐると思われるプレハブが何個もおかれていて、プレハブ内にはパイプ椅子に座つて酒を飲んだりタバコを吸つたりしてゐるテロリストが大勢いる事を確認できた。

「アイツら、朝っぱらから酒飲んでやがる。さすがロシア人と言つたところか。」

田中はそう呟くと村内部へ視線を移す。
村の内部はテロリストが銃を持って徘徊していた。

「ん? なんだあれは? 」

田中が不信に感じ、ある集団を見た。

数名のテロリストが日本人を6名銃で脅して建物へ入れている。
年代も性別もバラバラだ。

「民間人を処刑するのか? 急がなきゃヤバイな 」

そう思った時、丘の下の方から誰がが数名こつこつに向かつてゐるのを
発見した。

伏せた体勢のまま、田中は腰につけた弾帯の中からドーランを取出
し、顔に塗り付けた。

ドーランというのは、茶色や黒や緑や黄色といった顔にまばらに塗
つて迷彩効果を高める物である。
さながら自衛官の化粧道具だ。

田中は素早い手つきで、顔を塗り、更に唇、まぶた、耳や耳の中、
首、に各色を塗り付ける。

顔を塗つても、耳や首を塗つてないと結局見つかる羽田になるのだ。
このドーランという道具は夜間特に効果を發揮する。

夜間といつのは白い物は特に田につきやすくなる。
一度試してみてほしいが、夜に肌をさらすのとやむを得ないとでは
歴然の差がある。

田中はその後、少し離れた草むらに移動し、ゆっくりと伏せの体勢に移行した。

足音が段々と近くなる。
何やら話してゐようだ。

ロシア語が近くになればなるほど、田中の心拍数が上がりしていく。
田中との距離約3メートル。

テロリスト達は手にAK47を持ち、防寒のためか顔にはフェイスマスクをしている。

(ここから期待を裏切らないよつたテロリストの格好だな。)

田中はそう思い、見つからないことを祈つた。

今少しでも音を立てれば自分はAK47から放たれる7.62mm弾によつて蜂の巣にされるだろつ。

足音と話し声は段々と遠ざかり、田中はほつとため息をついた。

「多分吊橋を確認しに行つたんだろうな。ヤツらに見られたら誰が通ろうとしたことがバレてしまつた。さて、どうするか」「

田中は考えた挙げ句、取り敢えず今は無視する事にした。
相手は3人でアサルトライフルを持つてゐる。
ヘタにやりあわない方が得策だろつ。

田中はまた場所を移動して、丘を警戒しながら下る。

木立に囲まれた場所で腰を下ろし、弾帯のタバコケースからタバコを一本取り出してジッポライターで火を着けた。

あまり戦場でタバコはよくないのだが、田中は張り詰めた気をほぐすために一服も必要だと考えていた。

それにこゝは敵も通らないだろ？

地面には足跡が一つもない。

田中はタバコをくゆらせながら今後の行動を考えていた。

（まずはテロリストの手薄な場所から侵入するとしよう。南側から侵入するのがよさそうだ。その後、村を偵察。テロリストは一人で排除するのが難しいから一の次だ。今は暁鈴音の捕われているあのばかでかい屋敷に潜入して暁鈴音の位置を特定しなければならんな。）

田中は紫煙をうまそうに吐き出し携帯灰皿にタバコを捨てた。さすがにそこそこに吸殻を捨てるを見つかる可能性がある。

田中はリュックから陸自迷彩柄のテープを取り出し、89式小銃に巻き始めた。

銃もテープ等を巻いて擬装すると見つかりにくくなる。

ストックとハンドガード、マガジンに滑り止めの機能のついたテープを貼ると、握りしめ感じを確かめる。

満足した田中は89式小銃を握りしめ村へ向かつて進んでいった。

「こちら山蛇。ただ今白鳥村へ向けて前進中。先ほど、テロリストと思われる集団に遭遇した。以上。」

田中は無線機で本部に連絡を入れるとすぐに返信された。

「ハハハハ。了解した。大丈夫だつたか？詳しく報告せよ。」

「ハハハハ。草むらに伏せていたのでバレなかつた。テロリストは3人。AK47で武装し、多分吊橋の方面に巡察に行つたと思われる。以上。」

「ハハハハ。把握した。引き続き前進してくれ。」

田中は、話してゐる相手が自分の小隊の上官だなと思いながらどこか安心した。

「ハハハハ。了解した。引き続き任務を続行する。」

そのまま集落へ続く道を歩くと、集落の向こうにある大きな屋敷を目指した。

「とにかくあそこまで行かなければならんな。だが昼間に村へ入るよりも夜間に潜入する方が無難か。偵察しながら様子を伺つてみよう。」

89式小銃を構えながら森を進んで行くと、前方からまたしてもテロリストが一人こちらに歩いてきている。

（またかよ！取り敢えず隠れてやり過ごそつ ）

田中は木が生い茂つた中に身を潜めた。

その時、甲高い叫び声が聞こえ、テロリストが手に持つた拳銃を構えて辺りを警戒し始めた。

（なんだ今の声は？人間にしては動物みたいだつたな。にしても、状況が悪くなつたぜ）

身を潜めながら89式小銃をテロリストに向けて構える。安全装置をゆつくり外し、タ（単発）に合わせた。

テロリストに狙いを定めると、ふいにテロリストの側面から何かが飛び出してきた。

それは、半裸の女だつた。
むき出しにされた体からは胸を曝け出し、一見した所こいつは狂つてゐるではと思える出で立ちだつた。

「まさかテロリストに捕まえられてた人間が逃げ出してたのか？ならば助けなければ！」

田中が動こうとした瞬間、意外な事が起きた。
ふいを突かれたテロリストが拳銃を向けようとした刹那、女は相手を押し倒して一気に喉元に噛み付いた。
男は必死になつて抵抗しようとするが虚しく、女が喉笛を噛みちぎつた。

あふれ出る鮮血を体一面に浴び、女の白い身体が赤く染まつた。それを見たもう一人の男が腰を抜かし、後退りする。

女は食い千切つた男の傷口に指を突つ込み中身を抉る。
ぐちやぐちやという湿つた音がこちらにも響いてくる。
その後、首を捻り力任せに引きちぎつた。

胴体からあふれ出る鮮血は辺り一面を真つ赤に染め、枯葉をも赤く彩る。

男がロシア語で叫びながら背後へと後退るとさきれた首を舐め回していた女は首を捨て、新たに獲物を選定した。

「おいおい ここに狂つてることしてはやつすきてないか？」

田中は愕然としながら田の前で行われている殺戮を、ただただ見ることができなかつた。

田中も自衛官だ。故に凄惨な死体もその手の教育でプロジェクトを使つて見させられたが、生でこのよつた殺戮を見せられるとは思いもしなかつた。

後退りする男は努力虚しく捕まえられ、同じよつて首を噛みちぎられ絶命した。

その後、女は周りを見渡している。
気配がしたのだろうか？

田中は額から冷や汗を流し息を潜める。

（襲つてきたら発砲するしかないな だが銃声でテロリストにバレる事は避けたい。万事休すだ！）

キョロキョロと辺りを見渡している女を観察すると、おかしな点が田についた。

まず、あの女は元々奇形なのか？
皮膚は爛れ、あちこちから何かをポロポロといぼしている。
手も異常な程長い。
顔もしわだらけで落ち込んだ眼窩からは爛々と光る目が獲物を捜し求めている。

醜い顔だ。

一言で言えば、

「化け物」だった。

化け物はしばらく探していたが、田中を見つけられなかつたようだ森の奥へと去つていつた。

田中は10分程様子を見て戻つてこないのを確認すると、死んだテロリストの下まで向かつた。

テロリストは凄まじい苦痛の表情で絶命している。大量に出血したせいか、白人だったのにそれ以上の白い肌になつていた。

「ひでえなこりや」

田中は苦虫を噛み潰したような表情をし、テロリストから視線を外した。

テロリストの足下に落ちている拳銃を手に取り確かめる。

拳銃は、コルトガバメントM1911A1だった。

口径は45口径、弾は45ACP弾、装弾数7発の大型拳銃だ。

第二次世界大戦で米軍が使用し、それから半世紀程は米軍の制式採用拳銃だった。

信頼性も高く、威力も申し分ない。

死体のポケットからはマガジンが大量に出てきた。

銃に装填されてるのを含め、合計7個だ。

田中は、マガジンを胸に装備したアサルトベストのマガジンポーチに全て入れた。

もう一つの銃はロシア製のマカロフだ。

正式名はPM。弾薬は9mm×18で装弾数は8発。

ロシアで使われている小型の拳銃だ。

反動が比較的小さく、扱いやすい。

この男もマガジンを計五つ持っていた。

田中は男からレッグホルスターを取り、自分に装着し、ガバメントをホルスターに収めた。

マカロフはもう一つのホルスターを奪い、リュックに入れた。

「これでよしつと。ライフルだけじゃ近接戦闘ができないからな。にしても、敵はテロリストだけじゃないのか？あの化け物はなんだ？とにかく俺は進まなきやならん。」

田中は、改めて装備を点検し、集落へ向け前進した。

FILE 4 遭遇（後書き）

なかなか話が進まないんですがすみません。今までが序章的な物なので、これからが本番だと思って下さい。暖かい目で見守ってください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5137f/>

SOLITUDE WAR

2010年10月8日12時36分発行